

ヒューマニストとしての宮沢賢治

——戦後ヒューマニズム思潮が作家像に与えた影響——

服部 峰大

1、戦時体制における宮沢賢治

宮沢賢治は実に多様な作家像を持った作家である。この多様な作家像は賢治死後に創り上げられたものであり、これらの作家像がいかにして創り上げられてきたのかについては既に多くの研究がなされている。米村みゆきは、草野心平が「地方詩人宮沢賢治」を発見する東京を中心とした〈中央ルート〉以前に『岩手日報』と賢治の会を中心とした〈地方ルート〉が成立していたことを指摘し、そこで全集の販売促進を目的とした偉人「宮沢賢治」が数多く描かれ、この偉人像が後に東京で賢治を紹介する際、批評家に参考にされることで後の賢治言説の強化に繋がったことを指摘している^①。また村山龍は、一九三八年にベストセラーとなった『土に叫ぶ』の作者松田甚次郎が賢治を紹介したことで、農業と結びついた「聖農」と

しての宮沢賢治という作家像が広まったことを指摘した^②。

これらの研究は賢治の作家像がいかに形成されたのかを明らかにした。作家像の形成過程を探ることは文学研究において必要不可欠な研究の一つである。ただ、その作家が長期にわたって受容され、現代においても大きな影響力を持つている場合、その始まりを追うだけでよいのだろうか。賢治の場合、初期作家像は賢治死後の戦前に形成されているが、その後、大政翼賛会文化部や教科書といった様々な場所で多様な受容がなされている。このような賢治受容に鑑みた時、いかに作家像が創り上げられたのかだけでなく、その作家像がどのような変遷を辿ってきたのかを明らかにすることも重要な意味を持つはずだ。

本論では、終戦直後の賢治受容を中心に考察を行うことで、賢治の作家像（以下、賢治像）が時代に合わせてどのように変化したのかを明らかにする。一度形成された作家像が、変容を遂げながらも受容され続ける様子を追うことは、賢治がなぜこんなにも長く受容され続けてきたのかを明らかにする一助となるはずだ。

終戦直後の賢治受容に関して吉田司は、その要因の一つを左翼系の教員に求め、賢治の農民芸術くらいしか「血に汚れてない精神」が見つからなかったと指摘している^③。しかし、賢治は本当に血に汚れていなかったのだろうか。

一九四二年十月、大政翼賛会文化部が発行した『詩歌翼賛第二輯 改版常盤樹』^④は「雨ニモマケズ」を収録している。この本は奥付によると五万部が発行されたとされており、大きな影響力を持っていたことが窺われる。この本の「序文」では、世界が動乱する中で日本が東亜に対して使命を持つているとされ、その使命を達成するためには民族固有の詩精神が必要であると述べられており^⑤、その上で、「雨ニモマケズ」が「私」を滅した、はからひや高ぶりの無い境地」として紹介されている^⑥。ここでは高村光太郎による「序文」と「解説」という二つの文章を繋げて読むことで、「雨ニモマケズ」を戦時体制に対する滅私奉公を促す文章として読むことが可能となっていた。

また、満蒙開拓青年義勇隊向けに作られた教科書である『国語下の巻』は、「本書ヲ以テ皇民科国語ヲ学習スベシ」との巻頭文から始まり、「雨ニモマケズ」が収録され、賢治が「岩手県の農民のために一生をささげた詩人」^⑦と紹介されている。構大樹は『国語下の巻』に描かれた賢治像の背後に、昭和一〇年代における松田甚次郎の影響を受けた「土の聖人」的賢治像を指摘した上で、「雨ニモマケズ」が、「皇民」としての「精神」と「農民タルノ教養信念」を指導することを目的としつつ、満州における現実と希望との落差

から満蒙開拓青年義勇隊が自壊するのを防ぐために「農民」としての価値観を育むことを目的として使われたことを指摘している^⑧。『国語下の巻』において賢治は、満州における国策を推進し、隊の瓦解という現実の問題に対処するために使われていた。

さらに、一九四二年四月には大政翼賛会送定詩朗読レコードとして「雨ニモマケズ」がレコード化されており^⑨、戦時中に本や教科書といった文字媒体以外の多様な賢治受容があったことも窺われる。

ここまで見てきたように、戦時中の賢治は国策と関連付けられながら様々な形で受容されていた。勿論、これらの文物が実際にどの程度普及していたのかは分らず、当時の賢治受容の実態は判然としない。ただ、一九四四年の『朝日新聞』には「宮沢賢治詩碑拓本」の広告が掲載されており^⑩、恩田逸夫は戦時中に中国で内地から送ってもらった『東大新聞』に「雨ニモマケズ」が載っていたことを回想している^⑪。これらのことから戦時中、賢治が「雨ニモマケズ」を中心に様々な場所において多様な形で受容されていたことが確認できる。

戦時中、賢治は「雨ニモマケズ」を中心に国策に沿った紹介がなされることで受容されていた。同時代の国策と関連した他文芸作品と同じく、賢治作品もまた国策と無関係ではいらなかったのである。

2、戦中と戦後をつなぐ「イツモシヅカニ」

戦時中、賢治は国策と関係する形で広く受容されており、「血に汚れてない」わけではなかった。このような戦時中の賢治受容を皮肉って描いた作品として一九四六年『日本児童文学創刊号』に掲載された岡本良雄の「イツモシヅカニ」⁽¹²⁾が挙げられる。この作品では、戦争で両親を失い、バラック小屋で暮らす三吉と姉の生活が描かれるが、作中で歌われる「雨ニモマケズ」とその替え歌が重要な意味を持つ。以下、「イツモシヅカニ」のあらすじを示す。

ある日、姉が歌う「雨ニモマケズ」を聞いた三吉は嫌な気分になる。三吉は小学校五年生の時、修身の時間に受持の谷川先生から、「雨ニモマケズ」を「アラユルコトヲ、ジブンヲカンジョウニ入レズニ」という二行が「今の日本にとって一番だいじだ」と習い、その言葉を胸に勤労奉仕や畑仕事、防空壕作りを頑張った。しかし敗戦後、三吉は自分たちのしてきたことが、いつたい誰のためにしていたのかわけがわからなくなり、がっかりし、「雨ニモマケ風ニモマケ」と替え歌を歌うようになる。三吉が六年生になると受持が戦争帰りの片山先生に代わる。片山先生は「雨ニモマケズ」を、ぼくたちみたいな人間には少し上品でおとなしすぎると評し、これから、世の中をもっと良くするという欲、正しくないことへの怒りを持つべきだと生徒たちに教える。一方、谷川先生は六年女子組の受持となり級長選挙を行うが、選挙終了後に二人の欠席がいたとの理由で選挙を無効とし、響簾を買う。三吉は「谷川先生こそ、選挙の

公明正大をボウドク（冒瀆）されたのではなからうか」と考える。この話を聞いた姉さんも、それから「雨ニモマケズ」を替え歌にして歌うが、姉さんの替え歌は「イツモシヅカニワラツテバカリキズ、アラユルコトヲジブンノカンガヘヲハツキリイヒ」と三吉の替え歌とは少し違ったものだ。ある嵐の日、近隣のバラックが壊されていく中、三吉と姉さんは「雨ニモマケズ」の替え歌を歌いながら雨の中を走り回る。すると、近所のバラックに住む人たちも一緒に替え歌を歌い始める。風や雨だつてそうそう続くものではない。

本作で戦時中の「雨ニモマケズ」は、読方や綴方の時間に習った他賢治作品と異なり、修身の授業で扱われており、「アラユルコトヲ、ジブンヲカンジョウニ入レズニ」との一説が、戦時中の日本人にとって一番大事なところとされることで滅私奉公的な意味合いを持った作品として三吉に教えられている。「雨ニモマケズ」が実際に修身の授業で使われていたのかはわからない。ただ、先述した『詩歌翼賛第二輯改版常盤樹』、『国語下の巻』の存在に鑑みれば、当時の読者にとって「雨ニモマケズ」が戦時的な思想と繋げて読むことが出来た可能性は否めない。このような戦時体制的「雨ニモマケズ」は敗戦によって目標を失い、三吉は「戦争にまけたことよりも、家が焼けたことよりも、また、父や母を失ったことよりも、自分のして来たことが、いつたい誰のためにしてゐたのか、わけがわからないために、がっかりした」との理由から、詩の内容を真逆に読み替えた「雨ニモマケ風ニモマケ」を歌うようになる。このような三吉の態度からは戦時的な目標を失ったことで混乱する終戦直後

の人々の姿が連想される。

一九四六年において戦中の滅私奉公的な「雨ニモマケズ」は、目標を失い「わけがわからな」くなったとの理由から否定される。一方で、姉さんは三吉から聞いた民主主義や級長選挙の話をもとに三吉とは異なる「雨ニモマケズ」の替え歌を作り上げる。そこでは、「イツモシヅカニワラツテバカリキズ、アラユルコトヲジブンノカシガヘヲハツキリイヒ」と主体的に戦後社会に参入していく道が示される。実際に戦後民主主義と結びついた賢治受容はこの後に多く現れ、戦後、国語教科書に掲載された「どんぐりと山猫」では、民主主義教育の理念が見えやすい形に調整されたうえで掲載されていたことが指摘されている⁽¹³⁾。「雨ニモマケズ」を替え歌にすることで民主主義的な歌として読み替える本作の描写はこのような戦後賢治受容の先駆けともいえる。

「イツモシヅカニ」では、戦中の滅私奉公型の「雨ニモマケズ」が示され、それが終戦直後の目標喪失の中で否定されることで三吉の替え歌となり、さらに姉さんによって戦後民主主義的な替え歌に読み替えられていく。このような読み替えは「雨ニモマケズ」という詩が抽象的であるが故に可能であったことであるが、ここで問題としたいののは戦時中に国策と結びつけられていた「雨ニモマケズ」が、微妙な変化だけで戦後体制に結び付けられているという点である。実際、一九四六年の『初等科国語四』に「どんぐりと山猫」が掲載され⁽¹⁴⁾、翌一九四七年の国定教科書『中等国語一(二)』には「雨ニモマケズ」が掲載される⁽¹⁵⁾など、終戦後すぐに賢治作品の

国語教科書への掲載が行われていくことになる。

戦後、戦争協力的であったとされた作家や作品が批判されていく中で、賢治は微妙な変化だけで滑らかに戦後へと繋がっていく。では、実際に賢治はどのようにして戦後に繋がっていったのだろうか。本論では、終戦直後、賢治を紹介する際に数多みられた人間性評価を中心に戦後の賢治受容を考察することで、戦後社会に賢治が順応した一つの過程を明らかにしたい。

3、ヒューマニスト宮沢賢治

終戦後、賢治はどのように受容されていたのだろうか。終戦直後における賢治評価を確認したい。

最初に先述した「イツモシヅカニ」が発表された一九四六年における賢治評価を確認する。石田吉貞は、「この「雨ニモマケズ」の詩の真剣に求めている生活が、意外にも、日本に古く伝へられて来た草庵の生活を基調としたものであるといふことである。(中略)いまの荒みきつた日本の精神界、頽れきつた日本の道德界に、一雫なりとも欲しいのは賢治の生活の精神、ひいては草庵の生活の精神である。」⁽¹⁶⁾と、賢治を日本的価値観である草庵の生活と結びつけたうえで、このような精神が広まれば日本的な様式で戦後の様々な問題が解決すると述べている。石田は賢治を日本的なものと思いつけた上で、戦後社会の復興に必要な要素として扱っていた。高村光太郎は、農民という存在が生活していく上で必須であるにもかかわら

ず惨めな扱いを受けてきたとし、「宮沢賢治の説く所謂第四次元の芸術こそ此の問題を是正するものとして此処にその真意義を持つと私は確信する。(中略)農生活を基本として、国民生活一般の芸術魂獲得の道こそ所謂第四次元の願望である。」⁽¹⁷⁾と述べ、賢治が終戦後の農業さらには国民生活を見直す存在として扱われていることが確認できる。また、東光敬は、「『農民芸術概論』にあらはれたこれらの言葉も、流讀者としての、菩薩としての、宮沢賢治の位置から究めてこそはじめて理解されるのではなからうか。」⁽¹⁸⁾と法華経との関わりから菩薩としての賢治像を読み込んでいる。さらに儀府成一は「大事なのは、その何百人何千人かの技術家―否指導者たちが、その人間的な愛情と実践において、宮沢賢治を亜ぐものがあるであらうか」⁽¹⁹⁾と賢治を愛情と実践の人として捉え、賢治にこれからの世の中を支える指導者に必要な要素を読み取り、見習うべき人物として扱っていた。

これらの賢治評価からは、日本的な物と繋がった賢治、農業と繋がった賢治、法華経の信者としての賢治、実践者としての賢治といった様々な賢治像が浮かび上がる。このような賢治像はどれも戦前、戦中に見られた賢治像を援用しており、一九四六年における賢治紹介はそれまでに形成された賢治像を引き継ぎながら行われていたことが確認できる。一方で、これらの賢治像はその目標として敗戦からの復興を掲げており、目標だけは戦後の物へと変更されている。このような目標を戦後の物に変更するという手法は「イツモシズカニ」とも類似するものといえる。一九四六年代における賢治紹介

は、戦前の賢治像を使いながらも戦後の価値観に繋がられており、新しい戦後賢治像の模索の時期だったと考えられる。

だが、しばらくすると戦前と同じ賢治像を使いながらも、目標だけを戦後のなものに変えるという賢治紹介に新たな評価が現れ始める。それは賢治をヒューマニスト、ヒューマニズムを持った人間とする評価である。

一九四七年一月、佐藤治助は賢治を「社会科学者の抱く理想社会以上に高い平和な農村への道は、実に農民の一人一人がお互にこの苦難の重荷を希望をもつて負ひゆくと、ヒューマニティの(三文字読めず)にあることを愁ひ、ヒューマニストとしての宮沢賢治が、現代農村に大きくクローズアップされねばならないと確信します。」⁽²⁰⁾と評している。ここで賢治は、「彼の信仰から必然的に生れたところの愛心」⁽²¹⁾、「菩薩賢治」⁽²²⁾といった、それまでの賢治像を援用されながらも、ヒューマニストとして紹介されている。また、草野心平は一九四八年五月発行の『群像』で、賢治を、「宮沢賢治が有名になつたのはその「人間」と童話によつてであつて、その詩によつてではなさうである。」⁽²³⁾と、「人間」と童話から評価されてきたとしうえで、詩人としての賢治の行動を「東京に出たくなつたりしたのは彼のヒューマニティが自ら混乱をおこしたり、技術を求めようと思つてのはそのことであつて、「文学」はそこに微塵の関連もなかつた。北海道やサガレン行もヒューマニティのなした業だ。」⁽²⁴⁾と、「ヒューマニティ」との言葉を使うことで説明している。さらに、同年に岩手県長坂村で行われた講演において谷川徹三

は、「賢治のかういふ立場は、明かに人間中心の立場であります。

(中略) ここには深い宗教的心情があり、気高い宗教的行がある。

しかしその宗教的心情は、科学の認識と相通するものであり、その宗教的行はどこまでも民衆の中の一人として、民衆の心を心とするところに発してゐるのであります。その意味においてこの立場は、根本においてヒューマニズムの立場であります。」⁽²⁵⁾と、宗教、科学といった賢治像を、民衆の心という戦後的な言葉に接続したうえでヒューマニズムとの言葉でまとめた賢治紹介を行つていた。

このように戦後しばらくすると賢治をヒューマニスト、ヒューマニズムを持つた人間とする評価が散見され始める。そしてこのような評価に際してその根拠とされていたのは、菩薩や宗教的心情、宗教的行、科学の認識といった、すでに受容されていた賢治像であつた。

これらの評価を皮切りに、賢治をヒューマニスト、ヒューマニズムを持つた人間とする評価が続々と現れる。恩田逸夫は「一口に言つて彼の歩んだ道には、素朴なヒューマニズムに始まつてヒューマニタリアニズムに進み、更に深奥化平淡化されて、より高次のヒューマニズムに至る三段階が考えられます。」⁽²⁶⁾と、賢治のヒューマニズムを一般的なヒューマニズムよりも高次のものとして紹介している。このような評価からは、賢治を普通の人より優れた人間と見る天才言説との類似をみることも可能だろう。また、伊東一夫は、「私は今日の日本人のみならず世界人にとつて、切実な問題は、ヒューマニストとしてのあり方と幸福の課題にその根基がおかれてい

ると思う。(中略) こうしたヒューマニズムの問題が、殊に日本の文化において再検討されなければならないこの時、この点からする宮沢賢治の研究こそ先ず第一に着手せねばならない重要な課題である。」⁽²⁷⁾と、ヒューマニストの在り方の問題を世界レベルに広げ

た後に、理想的なヒューマニズムを持つてゐる人物として賢治を紹介している。この文章では、先述した谷川による賢治のヒューマニズムが引用されているが、細かな説明はなく、この時期に賢治がヒューマニストであるとの認識が一般化しつつあることが窺われる。

その後も、「世界的偉大なヒューマニスト」⁽²⁸⁾、「そして彼の詩の中核(中心)をなすものはヒューマニズムであるが、それは西欧的なものではなく仏教的ヒューマニズムである。」⁽²⁹⁾、「こゝにも農の環境に生い育つ宮沢賢治のヒューマニズムがある」⁽³⁰⁾、「類

稀な高貴にして博大なるヒューマニティをもつて、郷土を否世界を人類を愛し、その幸福を念願した彼は、郷土岩手の風土によつてその人間性が深く規定された。」⁽³¹⁾といった、賢治をヒューマニストとする紹介や、ヒューマニズムを持つていたとする評価が散見される。これらの評価でも、ヒューマニスト、ヒューマニズム、ヒューマニティといった言葉が、仏教、農、郷土といったそれまでの賢治像と関係付けながら語られている。

賢治は戦前にもヒューマニズムの文脈で注目されたことがあつた。賢治作品の多くを劇化した劇団東童の創設者である宮津博は理想とするリアリズム児童劇を、「児童演劇のリアリズムは、飽くまで、理想主義であることを特徴とする。そして現在の理想は、時代

のヒューマニズム思潮の進展と、われわれの直面してゐる国家社会の欲求との相関にあつて、健康な美・頑強な意欲・パイオニアの精神・集団的な正義等……が目標となる。」⁽³²⁾と説明している。ここでは国家社会の欲求と共にヒューマニズムが注目されており、このような観点から賢治作品が次々と演劇化されていくことになる。

この昭和一〇年代におけるヒューマニズムについて松本和也は多様かつ曖昧なままに大量に産出されたことを指摘しており⁽³³⁾、東童が指摘するヒューマニズム思潮の進展も一時の流行と見る事が可能だろう。ただ、このような目標を達成するために選ばれたのが賢治作品であつたことは、賢治作品がヒューマニズム的な読みと相性が良かつたことの証左ともいえる。

このような戦前における賢治作品のヒューマニズム受容に対して、一九五〇年頃までに見られたヒューマニストやヒューマニズムといった賢治評価は、それまでに形成された様々な賢治像を援用しながら戦後の新たな社会に繋がられていた。このような賢治評価からは、戦後社会に繋がる新しい賢治像としてのヒューマニスト宮沢賢治の姿を読み取ることができる。

ただし、一九五〇年十月に賢治研究誌である『四次元第二巻第九号』で行われた「宮沢賢治についてのアンケート」を確認すると、「岡本潤 四、賢治のヒューマニズムに感動しながら、そこにある「あまさ」に若干の不満をもたずにいられません。」⁽³⁴⁾、「佐藤さち子 賢治を愛し、そのヒューマニティを受けつぐもののなすべきことは」⁽³⁵⁾、「秋田雨雀 一、しかも、高いヒューマニティの精神

で生きていられたようで一層敬服します。」⁽³⁶⁾と、ヒューマニズム、ヒューマニティが賢治の持つ独立した要素として語られ始めていたことも確認できる。それまで他の賢治像と結びつくことで紹介されてきたヒューマニズムは、一九五〇年頃には賢治の持つ一つの属性としても捉えられていた。こうして、他賢治像と結びつくことで成立していた賢治のヒューマニズムは、賢治の持つ独立した価値観として成立していくことになる。

4、戦後ヒューマニズム思潮の勃興と衰退

では、賢治がヒューマニストやヒューマニズムを持った人間とされた一九五〇年頃までに、ヒューマニスト、ヒューマニズムといった言葉はどのような意味合いで使われていたのだろうか。

連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサーは、コロンビア大学で行われた名誉学位授与式に送った手紙の中で、アジア人にアメリカの人道主義を広め、イデオロギーの防塞とすることがアメリカの安全保障にとって重要だと述べていた⁽³⁷⁾。日本国内においてもかつての戦争の原因を日本人の人道主義の欠如に求める声が見られるなど⁽³⁸⁾、終戦直後の日本において人道主義の欠如とその復興は、戦時中の反省、戦後社会の復興に必須のものとして注目を集めていた。このような状況の中、ヒューマニティ、ヒューマニズムという言葉が、戦後における国民文化の基礎⁽³⁹⁾、人間らしい生活を送るために必要な思想運動⁽⁴⁰⁾、戦後の新しい人間に必須の能力⁽⁴¹⁾とし

で紹介されていくことになる。終戦直後の日本においてヒューマニティ、ヒューマニズムとの言葉は、戦後日本の復興に必須のものとして捉えられていた。

終戦直後の日本において、ヒューマニスト、ヒューマニティ、ヒューマニズムとの言葉は多用されていく。しかし、これらの言葉は必ずしも統一した意味で使われてはいなかった。それは時に、原子力が登場した新しい社会において必要な教養とされ⁽⁴²⁾、またある時にはプロレタリアートによる社会主義社会に向かうための条件とされた⁽⁴³⁾。このようなヒューマニズムの多様性について松本和也は、ヒューマニズムという言葉が使用者それぞれの立場から使えてしまうが故に、その内実が共有されないまま各自の含意を込めた議論ばかりがなされ、統一的な見解が構築されなかったと指摘している⁽⁴⁴⁾。ヒューマニズム、ヒューマニストなどの言葉は、終戦後の日本で多用されたものの、様々な場所では使用者各々の含意を込めて使われたが故に統一的な意味を持たなかった。

この様々な場所では使用者各々の含意で語られるというヒューマニズム、ヒューマニストの特徴は、賢治をヒューマニストとして評価する際にも見られた特徴であった。先述したように賢治をヒューマニストとする言説は、その根拠を他賢治像と結び付けることで示していた。その際に使われた賢治像は、天才、仏教、農、郷土など多岐にわたり、必ずしも統一されておらず、賢治がヒューマニストとされる根拠は論者ごとに異なったものとなっていた。

終戦後、ヒューマニストとの言葉は多様な使われ方がなされたも

の、統一的な意味を持つことはなかった。一方で、その統一性のなさこそが多様な受容に繋がったともいえる。賢治もまた戦前、戦中に多様な作家像が創り上げられた存在であった。この多様な作家像こそが、賢治をヒューマニスト、ヒューマニズムを持った人間として様々な角度から語ることを容易にし、終戦直後のヒューマニズム思潮と強く結びつくきっかけとなつたのではないだろうか。ヒューマニスト、ヒューマニズムを持つ人間としての賢治もまた、紹介者それぞれの含意によつて様々な場で語られており、何をもちて賢治がヒューマニストであるのかは棚上げにされたまま、ヒューマニスト、ヒューマニズムを持つ人間という賢治像だけが定着していったといえる。

戦後、ヒューマニスト、ヒューマニズムといった言葉は流行となり様々な場所では使われていたが、この流行もしばらくすると廃れていく。一九五五年六月に日本ヒューマニスト協会が発足し、同年八月にはアムステルダムでの国際ヒューマニスト連盟に加盟する。このような状況からはヒューマニストが已然、大きな影響力を持つているように見える。しかし、山室静は、「我国ではヒューマニズムというものがそれほどはつきりした輪郭をもちえず、従つて強力な運動を展開しえないものと思われる（中略）ヒューマニズムは現在の日本では甚だ人気がない立場だ。そしてヒューマニストというのはむしろ軽蔑の対象にさえなっている。」⁽⁴⁵⁾とヒューマニズムへの関心が薄れ、求心力を失っていることを嘆いている。また、日本ヒューマニスト協会の発起人の一人である藤原定も、「ヒューマニ

ズムは日本では微力であつたし、その上しばしば悪評を受け、嘲笑をさえ蒙つてきた。それは、ヒューマニズムでは真の社会改革はできないのだという批評と、日本のヒューマニストは甘ちゃんで無力なのだという批評との二つに分けられると思う。」⁽⁴⁶⁾と、日本におけるヒューマニズムの立場の弱さを嘆いていた。この二人のヒューマニズムに対する言葉からは、先述したヒューマニズム氾濫の結果、ヒューマニズムが広義にしか広まらず、発展を見せなかったことで廃れていった様子が見て取れる。

5、教科書における宮沢賢治の人間性評価

では、ヒューマニズムが廃れつつあった一九五〇年代半ば、賢治をヒューマニストとする言説も同じように廃れていったのだろうか。伊藤整は一九五八年に出版された『近代日本の文学史』で、賢治について「宮沢賢治は独自のヒューマニズムを持ち」⁽⁴⁷⁾と一言だけ言及している。この伊藤の言葉からは、賢治を解説する際に、詩、童話、農業、仏教、科学、郷土といった様々な賢治的要素を押しつけた、ヒューマニズムを持った人間という賢治像が注目されていたことが確認できる。一九五〇年代半ばになると、ヒューマニスト、ヒューマニズムといった言葉は人気をなくし、廃れていく。一方で、このような状況の中でも賢治がヒューマニズムを持っていたことは周知の事実となっていた。ヒューマニズムへの注目が薄れてゆく中で、なぜ賢治をヒューマニストとする評価は生き残ることができた

のだろうか。

先述したように、終戦直後の早い段階から賢治作品は教科書に掲載されていた。最も早く「雨ニモマケズ」が掲載された教科書である一九四七年の『中等国語一(一)』の編集に関わった石森延男は、「雨ニモマケズ」掲載が決まるまでの経緯を、「押して、押して、○田の係官に承知させた。そのとき、係官は、「一日ニ玄米四合ト味噌ト少シノ野菜ヲタベとあるが、玄米一合減して、三合にすることはできないか。」といいわたされた。詩の、文字修正は出来かねるといはいはつたが、「それでは、いまの現状とは、あわないではないか。実感が伴わないことになる。贅沢な主食と子どもたちに思われはしないか。」と理攻めで反問してきた。」⁽⁴⁸⁾と回想しており、実際に教科書に掲載された「雨にもまけず」では、「一日に玄米三合」⁽⁴⁹⁾への変更が確認できる。石森は「雨ニモマケズ」を教科書に掲載しようとした理由を、「この詩にこもっている人間としてのほんとうのよさは、戦後であろうと、戦前であろうと、また戦中であろうとかわるものではないと、かたく信じた」⁽⁵⁰⁾からだと回想しているが、終戦直後の食糧難の時代において、「雨ニモマケズ」は終戦直後の現実と重ねられ、その現実を反映させた上で教科書に掲載されていた。また、一九四九年の『国語』中学三年(一)』では、賢治の詩「春耕」が掲載され、「(5) 勤労の喜びを主題にした詩を作ってみる。」⁽⁵¹⁾との学習の手引きが示されており、ここでも生徒たちが従事している現実的な労働と作品を重ねた読みが行われていたことが確認できる。教科書掲載初期において、賢治作

品は現実的な生徒の生活と接続した上で読まれていた。このような終戦直後の賢治作品を扱った教材からは荒廃した状況の中で夢が語りにくかった終戦直後の様子が窺われる。

ただ、このような教科書における賢治像にも変化が現れる。一九五〇年の『国語生活中学校三年用下巻』は、「もうあと半年ばかりで、あなた方は中学校を卒業する。あなた方は将来何になるのだろう。（中略）けれども、みんながりっぱな人になることだけは必要である。どういう人がりっぱな人かは、今までこの教科書の方々で考えて来たのだが、この單元では特にそういうことについて考え、さらにりっぱな人になるには、いかに地味な努力を重ねなければならぬものであるかを深く考えてみよう。「雨にもまけず」は宮沢賢治の代表的な詩で、かれがどういう人になりたいと思っていたかがはつきりとうたわれている。」⁽⁵²⁾と、「雨ニモマケズ」に生徒の将来設計を重ねた解説を付している。ここでは、「雨ニモマケズ」が賢治の人となりと重ねられながら将来立派な人になるために必要な条件を教えるものとして扱われており、賢治の人間性が生徒の将来のためになるものとして扱われている。賢治の人間性は、現実の生活よりも未来に接続され、これからの社会の担い手となる子どもたちにとって必要な要素として提示されている。このような賢治の人間性を戦後社会に必要な要素として紹介するという手法は、終戦直後のヒューマニスト宮沢賢治紹介にも見られた手法であった。

翌一九五一年の『国語四の上』には賢治の生涯を伝記風に描いた「宮沢賢治」という教材が掲載されている⁽⁵³⁾。ここでは、賢治が

小学生の時に赤いジャケットを理由に虐められていた同級生を慮り自分も赤いシャツを着て来ると言い放つことで助けた話や、荷馬車の車輪に踏みつぶされた友達の泥と血だらけの指を自分のことのようを感じとつきに口に入れた話など、賢治の他者への思いやりに関する逸話が示され、最終的には「世界ぜんたいがこうふくにならないいうちは、ひとりびとも、決してこうふくにはならない。」との言葉で締めくくられる。この伝記では、子供の頃の賢治の他人を思いやる心が最終的に世界全体の幸福に繋がられており、賢治の他人を思いやる人間性を学ぶことが幸福な未来に繋がっていくようにも読める。ここでも賢治は学ぶべき人間性を持った人物として扱われ、その人間性が幸せな未来に必要なものとして読むことができる構図で描かれていた。

その後も、賢治の人間性を通じて生徒に将来を考えさせる教材は散見される。一九五三年の「詩碑をたずねて（一）雨ニモマケズ」では、「雨ニモマケズ」から賢治の人間的な生活態度、清らかな生き方が見出され、その上で、賢治の態度を生きていく上での心構えとする道が示される⁽⁵⁴⁾。また、同年の『中学標準国語二下』では、「人類的夢」という單元内で「グスコープドロの伝記」が扱われ、

「（２）作者の空想的な考えと、将来に対する夢をまとめて箇条書きにしてみよう。（３）作者の生いたちや人柄を調べ、それと、この夢との関係について話しあってみよう。（４）めい／＼の夢を文にしてみよう。」⁽⁵⁵⁾との学習の手引きを付けることで、作品と重ねる形で賢治の生い立ちや人柄が紹介され、その上で生徒が各々の

夢について考える課題が設定されていた。ここでも賢治の生い立ちや人柄は生徒の夢という未来に接続されている。

終戦直後に流行したヒューマニズム思潮が廃れていった一九五〇年代初頭、賢治は教科書の中で教材として扱われることによつて、その人間性が生徒や世界の未来と重ね合わされながら紹介されていた。賢治がこのような形で扱われた背景として教科書という掲載媒体の影響があつたことは否定できない。しかし、国語教科書上で賢治の人間性が評価された背景の一つとして、終戦直後に流行したヒューマニズム思潮の中で、賢治もまたヒューマニストとして様々な場所での人間性を評価されていたことが関係してはいないだろうか。賢治はヒューマニズムが流行する中で広範なヒューマニスト像で語られ、戦後教科書で見られた、賢治を偉人、見習うべき存在として扱う手法は戦前、戦中とそれほど変わらないように見える。しかし、一九五〇年代の教科書に描かれた賢治の作家像には、終戦直後のヒューマニズム思潮の流行と、その影響を受けたヒューマニスト宮沢賢治という新しい賢治像の影響を読み取ることが出来ないだろうか。

ところで、このようにして創り上げられたヒューマニスト宮沢賢治はその後どのように受容されたのだろうか。宮沢賢治生誕百年の翌年、一九九七年三月九日に関井光男、村井紀、吉田司、柄谷行人で行われた共同討議「宮沢賢治をめぐって」では以下のような会話がなされていた。「関井 そう考えると、賢者宮沢賢治とか、法華経の

行者宮沢賢治とか、ヒューマニスト宮沢賢治という虚像は、別な文脈に置きなす必要がある。柄谷 どうしてヒューマニズムなんですか。関井 賢治のヒューマニズム理解というのは多いですよ。柄谷 仏教もキリスト教も元来、ヒューマニズムではないですよ。人間中心主義、主体主義と反対のものでしょうか。関井 そういうふうには理解していないんですよ。」⁽⁵⁶⁾。この共同討議は宮沢賢治の偉人像を批判するものであつたが、ここで柄谷は賢者、法華経の行者といった賢治像には反応せず、賢治がヒューマニズムの文脈で扱われていることに強い疑問を示している。また、このような柄谷の疑問に対して関井は賢治のヒューマニズム理解が多いとしか答えられず、なぜ賢治がヒューマニストとして扱われるのかについては誰も答えられない。このような会話からは、ヒューマニスト、ヒューマニズムを持った人間という賢治像が根付いた一方で、何をもちて賢治をヒューマニストとするのかという定義は相変わらず定まつていないさまが読み取れる。戦後、様々な賢治像と繋がることで広まり定着した賢治のヒューマニスト像は、様々な賢治像と繋がったが故に統一した定義を形成できず、現代においても茫洋としたイメージで語られている。

ここまで確認したように、現代においても宮沢賢治のヒューマニスト理解の定義は曖昧で茫洋としている。このようなヒューマニスト宮沢賢治の曖昧さは、賢治のヒューマニスト像が戦後のヒューマニズム思潮の盛り上がりの中で、それまでの様々な賢治像を援用しながら作り上げられたことと関係していた。戦時中、滅私奉公的に

使われた賢治は、戦後社会の立て直しを目的としたヒューマニズム思潮の流行と繋がり、更には人間性を評価されながらその作家像を教科書上で定着させていく。このようなヒューマニスト宮沢賢治を巡る動きからは、賢治像の時代状況に合わせた受容の変遷を窺うことができる。

注

- (1) 米村みゆき「盛岡発・偉人のプロデュース」『宮沢賢治を創った男たち』青弓社二〇〇三年二月
 - (2) 村山龍「賢治没後の作品公表史」『〈宮沢賢治〉という現象 戦時へ向かう一九三〇年代の文学運動』花鳥社二〇一九年五月
 - (3) 吉田司「聖者伝説の時代」『宮澤賢治殺人事件』文藝春秋二〇〇二年一月
- 「こゝして戦前の賢治と違って、戦後の賢治はいきなり文部省レベルから出発したのだが、それを支持したのは意外にも左翼系の教員たちだった。というのも、真壁や北方教育運動など軍国ファッショの前に転向をよぎなくされた人々が、戦後の労働運動の指導的な地位につき、賢治の特に〈労農イメージ〉の良い側面にスポットを当て「宮沢賢治の再評価」をおつ始めたからだ。(中略)戦前日本にひとつとしてろくな反戦思想がなかったおそまつさの反映で、賢治のあの「レコードとヒヤシンス」のブンチャカ／＼農民芸術ぐらいしか「血に汚れてない

精神」が見つからなかったからだ――文部省も右翼も左翼も推薦する宮澤賢治―これが、「農民のために生き農民のために死んだ」という賢治伝説が戦後平和の民主主義の土壌に根付いた最大の栄養源だったと私は思う。」

- (4) 大政翼賛会文化部編『詩歌翼賛第二輯改版常盤樹』翼賛図書刊行会一九四二年十月
- (5) 高村光太郎「詩精神」大政翼賛会文化部編『詩歌翼賛第二輯改版常盤樹』翼賛図書刊行会一九四二年十月
- (6) 高村光太郎「雨ニモマケズ 解説」大政翼賛会文化部編『詩歌翼賛第二輯改版常盤樹』翼賛図書刊行会一九四二年十月
- (7) 宮沢賢治「雨ニモマケズ」満洲開拓青年義勇隊訓練本部編『国語下の巻』富山房一九四三年七月
- (8) 構大樹「雨ニモマケズ」教材化の前夜―満洲開拓青年義勇隊の試み」『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』大修館書店二〇一九年九月
- (9) 小倉豊文「イーハトーヴオへの道(三)―宮沢賢治研究への小さな道しるべとして」『農民芸術第八集』農民芸術社一九四九年七月
- (10) 花巻賢治の会「広告宮沢賢治詩碑拓本」『朝日新聞朝刊』一九四四年六月四日一面
- (11) 恩田逸夫「賢治遍歴」『四次元第十一巻第一号』宮沢賢治研究会一九五九年一月(引用は恩田逸夫『宮沢賢治論3 童話研究他』東京書籍一九八一年十月による)

- (12) 岡本良雄「イツモシズカニ」『日本児童文学創刊号』新世紀社一九四六年九月
- (13) 構大樹「どんぐりと山猫」と民主主義教育」『宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか』大修館書店二〇一九年九月
- (14) 「どんぐりと山ねこ」『初等科国語四』文部省一九四六年一月
- (15) 「雨にもまけず」『中等国語一(二)』文部省一九四七年二月
- (16) 石田吉貞「賢治と草庵―山庵雑記―」『岩手タイムス』一九四六年二月一日(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第三卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (17) 高村光太郎「第四次元の願望」『農民芸術第一輯』一九四六年五月(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第三卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (18) 東光敬「流謫者」『農民芸術第一輯』一九四六年五月(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第三卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (19) 儀府成一「宮澤賢治の人間像―主として農民詩を通じて―」『農民芸術第二輯』農民芸術社一九四六年十二月
- (20) 佐藤治助「農村に力を與ふるもの―宮沢賢治について―」『北辰第七号』北辰社一九四七年十二月
- (21) 前掲、佐藤治助「農村に力を與ふるもの―宮沢賢治について―」
- (22) 前掲、佐藤治助「農村に力を與ふるもの―宮沢賢治について―」
- (23) 草野心平「宮沢賢治の詩の性格」『群像第三卷第五号』一九四八年五月(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第五卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (24) 前掲、草野心平「宮沢賢治の詩の性格」
- (25) 谷川徹三「もろともにかがやく宇宙の微塵となりて」『ヒューマニズム』細川書店一九四九年四月(一九四八年十二月一日岩手県長坂村で行われた講演に基づく)
- (26) 恩田逸夫「賢治文学の展開―人間の線に沿って―」『四次元第二卷第一号』一九五〇年三月(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第七卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (27) 伊東一夫「修羅の渚」を讀みて―宮沢賢治珠玉選―」『四次元第二卷第四号』一九五〇年四月(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第七卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (28) 小田邦雄「輝く宇宙の微塵となりて」『成長する青年第四卷第五号』一九五〇年五月(引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第七卷』日本図書センター一九九〇年六月による)
- (29) 蔵原伸二郎「宮沢賢治―法華経と科学の詩人―」『詩人の歩いた道』梧桐書院一九五〇年八月
- (30) 坂本徳松「農民とともに歌う土の詩人 宮沢賢治」『東西百傑伝第二卷』池田書店一九五〇年三月

(31) 伊東一夫「宮沢賢治の文芸における―「風」の探求―」『四次元第二巻第八号』一九五〇年九月（引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第七巻』日本図書センター一九九〇年六月による）

(32) 宮津博「児童劇と理想主義」『児童劇第二六号』日本児童劇協会一九三八年五月

(33) 松本和也「昭和一年の〈ヒューマニズム〉ブームと言説構造」『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房二〇二一年一月

「この時期の〈ヒューマニズム〉言説は、こうした三層構造をゆるやかに共有しており、それゆえ多様かつ曖昧なままに大量に産出され、以後も昭和一〇年代を通じて、〈ヒューマニズム〉という表看板を変えることなく、時代に応じた意味作用を果たしていくのだ。」

(34) 「宮沢賢治についてのアンケート」『四次元第二巻第九号』一九五〇年一〇月（引用は続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第七巻』日本図書センター一九九〇年六月による）

(35) 前掲「宮沢賢治についてのアンケート」

(36) 前掲「宮沢賢治についてのアンケート」

(37) 「全アジアの人民に人道主義の息吹き マックアーサー元帥強調」『朝日新聞朝刊』一九四七年二月二四日一面

「すなわちわれわれは、自由な人間として生活を求めるアジアの人民たちの間に、米国の持つ人道主義の考えを平和のうちに

しみこませ、もつてイデオロギー的害悪の拡大に対する強力な防塞をつくつて、はじめて米国の安全保障が実現され」

(38) 「天声人語」『朝日新聞朝刊』一九四七年二月二五日一面

「日本人が国際的に人道主義を無視した事実、極東裁判の過程に気恥かしいまでに暴露された。今日の国内生活における人道主義の欠如は、連日連夜くり広げられる犯罪絵巻によつていみじくも立証されている。」

(39) 西谷啓治「国民文化とヒューマニズム」『人間第一巻第一号』鎌倉文庫一九四六年一月

「充実した意味でのヒューマニティーの立場は、上にいつたやうに、全く異質的な文化の間にも共通な場を与へ、話合ひを可能ならしめ得る。（中略）それはまた、初めに言つたやうに、一つの国家のうちに於て諸々の階層の間に、また国民と国民の間に、互ひに「話のわかる」といふ精神的連帯を与へ、国家を精神的な基礎から統一し得るものである。かゝる立場がなければ、そしてその立場の上に普遍性をもつて成り立つ国民文化といふものがなければ、同じ国家の民の間でも話がわからなくなり、国家は精神的に分裂する。」

(40) 伊豆公夫「新しいヒューマニズムに就いて」『歴史学入門』

霞ヶ関書房札幌支社一九四七年一〇月

「人間が人間らしい生活をいとなむことが出来ない時、その状態をぬけ出して、新しい光を求める思想運動、―それがヒューマニズムだと私は考えている。」

(41) 小田切秀雄「ヒューマニズムということば」『文学の窓』玄理社一九四八年一月

「わたしたちは人間性の回復、その自己開発と全面的な開花とを欲する故に、人間全体にとつてこのことを現実を保証するような社会の仕組み、制度を創り出そうとしないではない。そしてその創出がほかならぬ人間自身の手によつてしか行われぬ以上、その任に堪え得る新しい人間内容がその創出の現実的努力の過程の中で創出されないではないだろうか。ヒューマニズムはこのような新しい人間の内容としてのみ、こんにち真に清新な生命力をもつて生きることができよう。」

(42) 鈴木成高「文芸復興とヒューマニズム―近代精神の形成―」『人間第一巻第九号』鎌倉文庫一九四六年九月

「既に行き詰つた古きヒューマニズムの克服を通してもたらさるべき人間性の再発見のみが、初めて原子力時代を担ふに相応しき新しき教養人を登場せしめるであらう。」

(43) 前掲、伊豆公夫「新しいヒューマニズムに就いて」

「もし新しいヒューマニズム、すなわち第四のヒューマニズムが起り得るとするならば、この社会的基盤の上に立つて、それは民主主義的でなければならぬし、又プロレタリアートによつて指導されるものでなければならぬ。(中略) ヒューマニズムが、人間らしい生活をいとむための光を求める思想運動であるとすれば、社会主義社会こそ、その帰着点でなければならぬ。新しいヒューマニズムは、その歴史的展開の上に成熟

するのである。」

(44) 松本和也「『人間失格』が生きた戦後―抵抗概念としての『人間』」『太宰治『人間失格』を読み直す』水声社二〇〇九年六月

(45) 山室静「ヒューマニスト協会など」『近代文学第十巻第九号』近代文学社一九五五年九月

(46) 藤原定「ヒューマニストのあり方について」『近代文学第十巻第十一号』近代文学社一九五五年十一月

(47) 伊藤整「昭和の詩人」『近代日本の文学史』光文社一九五八年九月(引用は『伊藤整全集』二二)『新潮社一九七三年三月による』

(48) 石森延男「『麦三合』の思い出」『宮沢賢治全集月報第一号』筑摩書房一九五八年七月(引用は統橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成第二巻』日本図書センター一九九二年二月による)

(49) 前掲、「雨にもまけず」『中等国語一(二)』

(50) 石森延男「わすれかねることば」『石森読本六年生』小学館一九七七年八月

(51) 「春耕」『国語』中学三年(二)『教育図書一九四九年七月

(52) 「雨にもまけず」『国語生活中学校三年用下巻』日本書籍一九五〇年五月

(53) 「宮沢賢治」『国語四の上』教育出版一九五一年六月

(54) 「詩碑をたずねて(二) 雨ニモマケズ」『中等新国語文学編

二年上』光村図書出版一九五三年六月

「サウイフモノニ ワタシハ ナリタイ」と願った、かれのいう「デクノボウ」の文字が目にしみる。この文字こそ真の人間的な生活態度であり、人生における清らかな生き方ではないかと考えさせられる。（中略）われわれが生きていく心がまえとして、この「雨ニモマケズ」の精神を自分の心とすることができるならば、人の心の中はどんなに平和なことであろうか。」

（55）「グスコーブドリの伝記」『中学標準国語二下』教育図書

一九五三年四月

（56）関井光男、村井紀、吉田司、柄谷行人「【共同討議】宮沢賢治をめぐって」『批評空間第Ⅱ期第一四号』太田出版一九九

七年七月

〔付記〕

* 本論文は二〇二二年一月に大阪大学文学研究科博士後期課程に提出した博士論文「宮沢賢治受容の研究―戦後受容と生前雑誌発表作品を中心に―」内の「第一章 終戦直後における賢治像の変遷―ヒューマニスト宮沢賢治の登場―」に加筆、訂正を加えたものである。

* 引用に際しては、原則として漢字の旧字を新字に改め、ルビを省いた。

（本学国語教育講座）